

# 東彼杵 ダラフ

18/23郷 坂本郷

坂本郷に伝わる坂本浮立は約355年、  
様式の変わらない無形の民俗芸能。  
伝統の灯を絶やさず、稽古に励む後継者たち。  
この秋、自慢の新米とともに披露される。



# 坂本浮立を守る、変えられない



## 伝統

茶畑と棚田が織りなすのどかな農村風景に、風が流れるように響く笛の音、そして太鼓、鐘、舞がある。坂本浮立は万治3(1660)年、佐賀県藤津郡岩井川内の三根恵市左衛門から、今春太夫正冬伝授の「外山流一伝記」の巻物とともに、中尾九郎兵衛、岩崎十兵衛、山口五郎兵衛に伝わったのがこの地での始まり。当時は大村藩の御用浮立として重用され、袴には五木瓜紋が許されていた。また、明治23(1890)年には明治天皇の御前で披露した由緒正しい浮立である。

坂本浮立の特徴は、神楽の流れをくむ格調高い7つの舞の座浮立と、槍やハサミ箱などを手にして行列を組んで道行きする道囃子にある。笛はそれぞれの曲に合わせて30曲以上、御謡も舞ごとで17あり、これも坂本浮立独特のものだ。

現在は坂本郷に住む75世帯すべてが坂本浮立保存会となり、地域がまとまり伝統文化の保存と継承に努めている。稽古は坂本コミュニティセンターで月数回、一年を通して行われる。ここは坂本浮立会館でもあり、浮立に関する数々の道具などが大切に保管されていた。

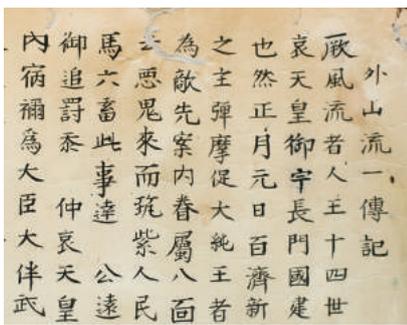
8月は盆に虫干し、また夏休みで子どもたちも稽古に参加するというので、保存会長の高坂喜一郎さんに連絡して訪ねた。虫干しには生憎の天候だったが、鬼神面や巻物の一片を見せていただいた。「巻物の本物は見たことなか」「滅多

に見られるもんじゃなかぞ(笑)」とあちこちから声が出てくる。坂本浮立を守る住民にとって、この巻物がいかに大切なものかは後でわかった。

「浮立は形がなかとやけん、巻物と一緒に伝わったことが重要」と会顧問の川添要介さんが教えてくれる。坂本浮立の長い歴史の中で、当然、戦中・戦後は中断せざるを得ない状況だった。戦後、再興に尽力した中心人物に川添さんの父もいた。地域をあげて毎日、夜遅くまで稽古に励み、昭和32(1957)年復興。氏神様に奉納する披露祭は境内をあふれるほどの人で賑わったそうだ。

昭和34(1959)年には、長崎県無形文化財の指定を受けた。「県は文化財登録にあたり、3人の墓までちゃんと調べてくれた。単なる言い伝えではなく、史実に基づき立証されたことが大きい」と川添さん。坂本に浮立を絶やさないという住民の思いはより強く、巻物は心のよりどころになった。

道囃子の行列構成も、座浮立の配置や7つの舞もすべて、巻物の記述の通りに行ってきた。全体の稽古では太夫が中心となって場を取り仕切る。太夫が1人で担うのは、複数いるとどうしても個々のスタイルが出て本来の形が崩れてしまいかねないからだ。坂本浮立は何も変えられないし、何も変えない。ありのまま引き継ぐのが伝統なのである。



上から

- ・座浮立「鬼神囃子」で太夫がつける鬼神面
- ・坂本浮立の証左となった「外山流一伝記」
- ・音色を継ぐ難しさも教えてくれた川添さん



受け継ぐ子供達の

座浮立は立役者と呼ばれる子どもたちの晴れ舞台となる。この日の稽古には4人の小中学生が参加していた。親の転勤で島原に引っ越した西坂悠矢くんだが、「故郷の伝統を大切にしたい」という思いで坂本浮立を披露する際は帰ってくる。

「遅かぞ!」「そうだ」「自信を持ってやれさ」と自分の孫が登場すると、おじいちゃんたちは叱咤激励して可愛がる。稽古を始めたばかりの子どもたちは誰もが通る儀式のようだ。松本裕太朗くんと釜坂悠陽くんに声をかけると、「楽しい!注意されるのは嫌だけど、言われないように頑張るだけだもん」と口を揃えた。テレビやゲームでもないのにその返答には驚いた。小学生ながら坂本郷のDNAがしっかりと入っている。伝統をつなぐために、自分たちが大きな役割を担う、立役者になるべきことに気づいているようだった。

真まなざし

左上・西坂悠矢くん(奴) / 右上・釜坂悠陽くん(追廻し) / 左下・松本裕太朗くん(本囃子) / 右下・佐藤来紀くん(追廻し)



浮立で固く結ばれた

## 地域の絆



上から

- ・ 棚田を元気に走り回るヤギたち
- ・ 釜ノ内の湧水を湛えて水車が回る

「あそこは検査でも大腸菌ゼロ。よか水よ」と釜坂松美さんから釜ノ内湧水のことを聞いた。話の途中からは、追廻しを演じる孫に鋭い視線が集中していたのでここまでの情報だが、水道のプロが言うのであれば間違いなさそうだ。

連なる棚田の中を新幹線工事が急ピッチに進められていた。完成すれば景観はずいぶん変わりそう。無機質なコンクリートがいいのか、自然と草が生えた田畑がいいのか。

“やぎの家”があった。小屋の中には生まれたてもいて、ただ見ているだけでも飽きない。通りがかりの車が停まって、窓越しにいろいろ教えてくれた。耕作放棄した棚田を活用して有志で飼育しているのか。ヤギたちは食べ応えのある雑草を頑張って食べていた。

釜ノ内湧水地は水車が回っていて、いい雰囲気。奥には水神様が祀られていた。山の湧水はさすがに冷たいが、小さな子どもが足を浸かるには丁度よさそうな所もある。サワガニとも遊べる。

「私が小さか時からです。これがあると幸せね~と思いますよ」と釜坂キミエさんがヒエを握って水田から出てきた。古くから豊富な水量を誇り、農業水として、飲用水として地元で大切に利用されて

きたと言う。釜坂さんはこの湧水でワサビ栽培にも挑戦中だが、「まだまだ」とのことだった。

新幹線の通過予定地の付近をよく見ると、若い桜の木が植えられていた。景観のことは地域でちゃんと考えられている。実は川添さんたちが仕かけたもので、「約550本。春の車窓を楽しんでもらえたら」と植栽した。そのための草払いもみんなで行った。「よく浮立があるから大変ねと言われるが、浮立があるからまとまっていける」と川添さん。みんなの心をひとつにしなが、これからも浮立を柱に地域づくりをしていくつもりだ。

さて、今年の坂本浮立は10月18日に秋の収穫祭として披露される。約355年の伝統を受け継ぐ子どもたちの舞もさることながら、釜ノ内湧水で育てた新米のおにぎりも楽しみ。芸術と食欲の秋だから。

※坂本郷へは、町営バス「三の瀬」、JR九州バス「高吉」「坂本郷」「俵坂」のいずれかのバス停を利用。

次回は小音琴郷。お楽しみに！